

北山エリア整備基本計画（骨子案）

目 次

- 1 計画策定の背景と目的、基本的事項
 - (1) 策定の背景と目的
 - (2) これまでの経過
 - (3) 京都府計画における位置付け
 - (4) 北山エリアの基本的事項
- 2 北山エリア及び周辺地域のポテンシャルと課題
 - (1) 立地環境
 - (2) 北山エリアのポテンシャル
 - (3) 北山エリアの課題
 - (4) 北山エリア周辺地域の現状と課題
- 3 北山エリアの将来像
 - (1) 将来像
 - (2) エリアコンセプト
- 4 将来像を実現するための方策
 - (1) エリア整備の方向性
 - (2) 各施設の整備の方向性
 - (3) 留意事項

1 計画策定の背景と目的、基本的事項

(1) 策定の背景と目的

北山エリアは、豊かな自然環境の中、多くの府立施設が集積する府民の憩いの空間であるとともに、「文化と環境が共生する京都」を内外に発信する魅力ある拠点地域として大きな可能性を秘めていることから、京都府では、平成 21 年の「北山文化環境ゾーン整備推進についての検討報告」を踏まえ、この間、エリアの魅力向上のための施設整備に取り組んできた。

令和元年 10 月には、新たに策定した京都府総合計画において「北山『文化と憩い』の交流構想」を定め、この構想を北山エリアのまちづくりのセカンドステージと位置付け、今後段階的に整備を推進していくこととしたところである。

この「北山エリア整備基本計画」は、「北山『文化と憩い』の交流構想」を実現するにあたり、北山エリアの整備の方向性を示すために取りまとめるものである。

(2) これまでの経過

平成 21 年の「北山文化環境ゾーン整備推進についての検討報告」に基づき、

- ・ 文化と環境に包まれたやすらぎと交流の中で、京都を世界に発信する街
- ・ 開放感あふれ、歩いてまわりたくなる街

という街づくりのコンセプトのもと、以下の整備を順次進めてきた。

- 3大学（府立医科大学、府立大学、京都工芸繊維大学）連携による教養教育共同化施設の整備（平成26年度）、ボタニカルウィンドウなど、植物園の魅力を伝えるふれあいの空間の設置（平成27年度）、植物園の魅力向上のための各種の施設整備や回遊性を高めるための入園門の整備（平成29年度）、旧総合資料館と府立大学が連携した京都文化の研究・学習・交流拠点である京都学・歴彩館の整備（平成29年度）
- これらの施設をつないでエリア内の回遊性を高め、人の交流を促進するための広場・プロムナードの整備（平成31年度）

(3) 京都府計画における位置付け

令和元年10月に策定した京都府総合計画（京都夢実現プラン）においては、府内5つのエリア構想の一つとして、「北山『文化と憩い』の交流構想」を盛り込んだところである。

この構想では、これまでエリア内の個々の施設についての有識者による検討結果を踏まえ、

- 旧総合資料館跡地でのシアターコンプレックスと賑わい・交流施設の整備
- アリーナ機能を備えた府立大学、府立医科大学、京都工芸繊維大学の3大学共用の体育館の整備
- 複合的な機能を備えた正門等、植物園の施設整備

などにより、京都が世界に誇る文化と憩いに包まれた交流エリアの形成を目指している。

さらに、国際MICEを促進し、国内外から人が集い、交流するとともに、文化庁移転を契機として、京都から新しい文化創造を進め、その効果を北山エリアから周辺地域、京都市域、府域へと波及させることによる地域の活性化を目指すものである。

(4) 北山エリアの基本的事項

北山エリアは、賀茂川などの豊かな自然環境の中、府民利用施設等が集積する貴重な府民の憩いの空間であり、ここで国内外からの人が集い、交流することにより、京都から新しい文化・芸術を創造・発信する拠点となる大きな可能性を秘めている。

◆地理的位置

京都市域のほぼ中央、京都市街地の北部に所在。西は賀茂川、北は北山通、東は下鴨中通、南は府立大学の南側境界に囲まれている範囲を「北山エリア」と位置付ける。

◆面積 約38ヘクタール

◆都市計画等（地域の主な部分の規制等）

用途地域 （建蔽率・容積率）	第二種中高層住居専用地域 （60%・200%）
高度地区	20m第1種高度地区 （植物園の部分は、12m第1種高度地区）

景観保全	山並み背景型建造物修景地区 〔 植物園の部分は、風致地区第4種地域 〕 〔 北山通沿道は、沿道型美観形成地区 〕
眺望景観	眺望空間保全区域（船岡山公園からの「妙」「法」） 近景デザイン保全区域（賀茂川右岸からの東山） 遠景デザイン保全区域

2 北山エリア及び周辺地域のポテンシャルと課題

(1) 立地環境

◆文化的位置

- 世界文化遺産に登録されている上賀茂神社及び下鴨神社の間にあり、植物園内には、上賀茂神社の境外末社・半木神社が鎮座する。
- 周辺には、京都工芸繊維大学、京都ノートルダム女子大学、大谷大学、京都産業大学、府立洛北高校等の文教施設や、国立京都国際会館、京都市北文化会館をはじめ多くの文化施設が所在し、文化・学術的な集積が見られる地域となっている。
- また、賀茂川に面し、付近には貴重な水生植物群集が生育する深泥池（国の天然記念物）や五山の送り火の妙法で名高い松ヶ崎の西山・東山が位置し、比叡山が間近に望めるなど、豊かな自然環境に恵まれている。



◆交通上の位置

- 京都市街の交通の背骨とも言える地下鉄烏丸線の北山駅が域内に所在し、国際会館駅へは2駅4分、京都市街地中心部四条駅から12分、京都駅から15分でアクセスすることができる。さらに、東京から約2時間40分、関西国際空港からは約1時間45分で結ばれている。
- また、地下鉄烏丸線の北大路駅からも徒歩約10分に位置し、同駅に隣接する北大路バスターミナルには市内各所に至る18のバス路線が発着している。

◆防災上の位置付け

- 府立植物園、府立大学グラウンドは地域住民や来訪者の災害時の避難場所として、京都市の広域避難場所に指定され、重要な役割を担っている。

(2) 北山エリアのポテンシャル

- エリア内には、府立植物園、府立大学、府立京都学・歴彩館、京都コンサートホール等が集積し、個々の施設が高いポテンシャルを持った、府民にとって身近に文化・芸術と環境が共生する豊かな空間となっている。

- 多くの研究者や学生等が集うアカデミックな地域でもある。
- 市街地中心部から近く、交通アクセスが便利な場所でありながら、豊かな自然環境に恵まれた一定規模のエリアであり、立地施設との相乗効果を発揮した事業展開が期待できるなど、民間活力導入についてポテンシャルがある地域である。

(3) 北山エリアの課題

- 各施設は区切られた閉鎖的な空間となっており、府民にとって往来しにくい空間となっている。
- 賑わい・交流機能が少なく、訪れた人がエリア内を周遊、滞在しにくい。
- 各施設ではハード・ソフト両面での連携が不足している。
- 府立植物園の正門や観覧温室、府立大学の体育館など、エリア内の多くの施設が老朽化しており、大規模改修や更新時期を迎えている。
- エリアの北東角に位置する旧総合資料館跡地については、北山通に面し、地下鉄北山駅に接するエリアの重要な場所であり、早急な施設整備が求められている。
- エリア内には、十分に活用できていない土地もあり、エリアのポテンシャルを最大限に発揮する観点から、他用途への転用等の検討が必要となっている。

(参考) 北山エリアの文化施設等

◆府立植物園<敷地面積：約 240,000 m²>

- 大正 13 年(1924 年)、植物を育成栽培し広く府民の憩いの場としてこれを公開し、植物の觀賞を通じて一般の教養に資するとともに、植物学の研究に寄与するための施設として開園
- 昭和 21 年(1946 年)から 12 年間連合軍に接収、多くの樹木が伐採
- 昭和 36 年(1961 年)、憩いの場、教養の場としてその姿を一新し、再開園
(その折の様子は、文豪川端康成の代表作「古都」にも表されている)
- 現在、1 万 2 千種・12 万本の植物を保有し日本を代表する総合植物園に成長
- 入園者数：家族連れのみならず、年間約 80 万人が利用(平成 30 年度)

◆府立京都学・歴彩館<敷地面積：13,400 m²>

- 平成 28 年(2016 年)、府民に京都の文化、歴史等に関する学習及び交流の場を提供するとともに、京都に関する資料等を収集、保存及び公開することにより、京都における文化の発展及び学術の振興に資する施設として開設
- 国宝「東寺百合文書」をはじめ国重文指定の古文書、京都府開庁以来の行政文書、古典籍をはじめ多くの図書資料等、第一級の研究価値を有する資料や美術・工芸品等を収集・保存・展示するなど、博物館機能、公文書館機能、図書館機能を併せ持つ複合施設として、旧府立総合資料館の機能を継承するとともに、新たに京都学に関する研究機能を整備
- 利用者数：学生や研究者等、年間約 26 万人が利用(平成 30 年度)

◆府立大学<敷地面積：104,576 m²>

- 明治 28 年(1895 年)、京都府簡易農学校として愛宕郡大宮村字紫竹大門に設置
- 大正 7 年(1918 年)、下鴨村(現在地)へ新築移転した校舎で授業を開始
- 昭和 24 年(1949 年)、文家政学部(右京区桂)、農学部(左京区下鴨)の 2 学部の新制大学、西京大学として発足(昭和 34 年(1959 年)、京都府立大学と改称)
- 平成 20 年(2008 年)、京都府立大学及び京都府立医科大学を設置・運営する公立大学法人が設立され、文学部・公共政策学部・生命環境学部の 3 学部 10 学科に再編。併せて府立医科大学、京都工芸繊維大学との 3 大学連携を推進
- 平成 26 年(2014 年)、下鴨キャンパス内に京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学による京都三大学教養教育共同化施設(稲盛会館)開設
- 学生数：学部・1,815 人、大学院・271 人(平成 30 年度)

◆府立陶板名画の庭<敷地面積：2,849 m²>

- 平成 6 年(1994 年)、陶板により描かれた世界の名画を自然とのかかわりの中で展示し、広く

府民が芸術作品に触れ合う場を提供する施設として設置

- 名画の美しさをそのままに再現した丈夫な陶板画を、安藤忠雄氏設計の施設に展示するもので、屋外で鑑賞できる世界で初めての絵画庭園
- 陶板画は全部で8点。このうち「最後の審判」など4点は「平成2年国際花と緑の博覧会」に出品されたもので、「テラスにて」など4点はこの施設のために新しく制作
- 利用者数：年間約53,000人が利用（平成30年度）

◆京都コンサートホール＜敷地面積：9,900㎡＞

- 平成7年(1995年)、音楽芸術の振興及び音楽を通じた国際交流の発展に資するため、音楽の鑑賞その他音楽に関する活動の用に供する施設として完成（京都市が設置・運営）
- 大小2つのホールと国内有数のパイプオルガンを備え、クラシックコンサート等が行なわれる京都最大級のコンサートホールで、京都市交響楽団の本拠地
- 利用者数：音楽鑑賞等で、年間約29万人が利用（平成30年度）

(4) 北山エリア周辺地域の現状と課題

- 北山エリア北側の北山通にはカフェ、レストラン、ブティック等が軒を連ね、植物園の豊かな緑とも調和し、オリジナルでハイセンスな街並みを形成している。街として一時の活況感に停滞が見られるものの昨今、パーティ会場やブライダル関連施設の集積が進むなど新たな展開が見られる。また、「現代性」、「国際性」など、自由でカジュアルなイメージを持つ地域であり、これらの特長を活かしたまちづくりが可能である。
- 一方で、近年、ハイセンスなセレクトショップ等が姿を消すなど、一時期の勢いに陰りが見られることから、北山エリアでの施設整備が地域にも波及効果を与え好循環を生み出すようなまちづくりが求められる。
- 京都の中心市街地から短時間でアクセスできる地域でありながら豊かな自然が残されており、環境と調和したまちづくりを行なうことで街中の喧騒を離れた憩いの空間の創出が期待できる。
- 国立京都国際会館や、多くの大学・研究機関が立地しており、北山エリア内施設との連携による相乗効果の発揮が期待できる。

3 北山エリアの将来像

(1) 将来像

北山エリアを、京都が世界に誇る文化と憩いに包まれた交流エリアとして、さらに魅力を高めるため、以下の5つをエリアの将来像として設定する。

豊かな自然に包まれた環境

- 賀茂川に面し、比叡山や松ヶ崎の眺望にも恵まれた豊かな周辺環境や閑静な住環境と調和した空間
- 中心市街地の喧噪から遠く、日常から離れたやすらぎと憩いの空間

オープンに繋がる空間

- それぞれの施設がオープンな空間で各施設及び周辺地域が繋がるまち
- エリア外を通らなくても回遊でき、思わず周遊したくなるような空間
- 植物園を核としながら、施設間で調和の取れた建築・空間デザインを形成し、それぞれの施設がハード・ソフト両面で有機的に連携し、互いに相乗効果が発揮でき

るエリア

多様な人々が集まり交流するまち

- 様々な施設が集積することにより、地域の人々をはじめ、学生や研究者、アーティスト、スポーツ選手など、幅広い世代の多様な人々が内外から集まるエリア
- このエリアに集う人々が、滞在し、互いに交流して多様な主体との共働ができるエリア
- エリア内の様々な施設や周辺の商業空間をはじめとする周辺地域が一体となった事業展開ができる、躍動するような祝祭空間
- このエリアの集客が周辺の商業空間に波及するなど、地域経済の活性化を促進するエリア

新たな文化・芸術の創造・発信の拠点

- 幅広い世代の多様な人々が内外から日常的に集まり、交流することで、新しい文化・芸術を創造・発信する拠点
- 豊かな自然環境の中で創造性を刺激されながら、新しい文化を生み出していく空間

文化・芸術・学術・スポーツに触れられる魅力的な空間

- 魅力的で非日常的な体験が日常的にあふれる、人を引きつけるエリア
- 様々な施設を巡り、終日、ゆったりと過ごせる空間
- ここに来れば何か楽しいことに出会えるとの期待を満足させるエリア

(2) エリアコンセプト

以上の将来像を踏まえ、

**憩いの緑と躍動するまちが融合した「文化創造の森」の創出
～豊かな自然の中で創造される文化・芸術・学術・スポーツに
身近に出会い、交流するまち 京都北山～**

の実現を目指す。

4 将来像を実現するための方策

(1) エリア整備の方向性

北山エリアにおいては、以下の方向性のもとでエリア全体の整備を推進する。

- 植物園の緑がエリア内に広がり、各施設が木々の緑の中に佇む空間の創出
- 施設の枠を越えて人が自由に往来できる空間づくり
- 日常的に人が集い交流できるまちの形成
- 新たに整備する建築物の外観に配慮し、調和の取れた景観形成

(2) 各施設の整備の方向性

ア 旧総合資料館跡地等

◆ 基本的な考え方

- エリアに立地する既存施設、周辺の国立京都国際会館や大学・研究機関等の施設と連携
- 府民をはじめ国内外の人々を呼び込み、エリア内に滞在し、豊かな自然環境の中で芸術・歴史・文化に触れながら、多様な人々と交流を深めることができるような機能の必要性
- 文化施設を単体で整備するのではなく、魅力的な体験ができる機会の創出や、コンベンション、宿泊、飲食等も含めた様々な機能を提供することによりエリアの魅力を高める。
- 公演・展示の開催時はもとより、それ以外の日でも創作活動のために日常的に人が集まり交流できる場の提供

◆ 施設整備の方向性

- 舞台芸術系（演劇・舞踊・ダンス等）・視覚芸術系（絵画・写真・工芸・華道・書道・デザイン・建築等）が集積した、京都の他の施設にはない交流・創造・発表の機能の整備
 - ・ 劇場を中心に様々な規模の創作スペースや練習場、展示空間等が集積したシアターコンプレックスを整備し、京都府における舞台芸術・視覚芸術の創作・発表・鑑賞の拠点施設を目指す。
- コンベンション、宿泊、飲食施設等の集積や、魅力的なイベントの開催等が可能な賑わい・交流機能の整備
- 北山エリアのエントランスに相応しい「広場」機能の整備

イ 府立大学

◆ 基本的な考え方

- 時代の要請や地域ニーズに対応できる「京都府における知（地）の拠点」として、北山エリアにふさわしいキャンパスを目指す。
- 大学独自のキラリと光る研究活動のさらなる発展と、それらを社会実装するための産学公連携等の推進、グローバル化に順応し新しい社会を創造しうる人材の育成強化などを軸に、既存分野に文理融合系等を加えた再編を行い、教育研究のさらなる充実と地域に貢献できるキャンパス環境を創出。
- 地域に開かれた大学として、セキュリティを確保しつつ、安心・安全でバリアフリーに配慮した空間を提供。
- 府立大学・府立医科大学の共同体育館については、京都工芸繊維大学との3大学連携に供するとともに、併せて学生スポーツの公式試合や国際試合等の開催も可能なアリーナ機能を備えた、学生スポーツの拠点として整備し、府民の一般利用や文化イベント等にも活用する。

◆ 施設整備の方向性

- キャンパス内に複数の棟が点在している現状から、社会環境の変化や、将来の学部再編等に対応できるフレキシブルな構造を基本とする。
- WITH コロナ・POST コロナ社会における新しい教育システムを構築するため、リモート講義等に適応した施設配置や、5G等の新たな情報ネットワーク環境を取り入れたスマートキャンパスとしての整備を検討
- 下鴨農場については、新産業創出を核とする関西文化学術研究都市の新たな中

核拠点としての精華キャンパスの再編・整備等との整合を図る。

- 用途に応じた、教育・研究ゾーン、地域連携ゾーン、スポーツゾーンのゾーニングを設定
 - ・教育・研究ゾーンには、ラーニングcommonsやキャリアサポートセンター等の学生支援施設のほか、情報メディアセンターなどの各種センター機能の集約を検討
 - ・地域連携ゾーンには、リエゾンオフィス、ミュージアム、地域未来創造センター、オープンラボ等、地域との交流が図れる施設を整備
 - ・スポーツゾーンでは、共同体育館については、公式試合を想定して、メインアリーナ、サブアリーナを整備し、利用・運営を工夫するなど、大学施設としての用途と多用途での活用を検討するとともに、さらにグラウンドについては、学生スポーツの拠点として、サッカー場や野球場等としての利用についても今後検討を進める。
 - ・書店、コンビニ、レストラン等民間の創意工夫を活用した施設の併設を検討

ウ 府立植物園

◆ 基本的な考え方

- 国内外の来園者が植物の観賞を通じて、憩い、くつろぎ、学びの場としてさらなる魅力向上を図るため、快適性、利便性の向上のための取組を進める。
- 植物園の大切な役割の一つである教育・学習機能や大学等と連携した研究・希少植物の保全活動を継続し、さらに発展させるため、必要な体制や施設の整備を進める。
- 植物園のサービスの向上や魅力向上、エリア内の回遊性を向上させるためのハード・ソフト両面での整備と併せ、民間のアイデアやノウハウの活用等、来園者の満足度を高めるための柔軟で弾力的な企画及び管理運営方法の導入について検討を進める。
- 様々な機能を持つ施設が集積した北山エリアに位置する植物園においては、エリア内に立地する各施設や周辺地域と連携した運営や魅力発信を行い、まち全体で交流や一体感を創出する仕掛け・仕組みづくりを行う。

◆ 施設整備の方向性

- ビジターセンター、カフェ・レストラン、ミュージアムショップ等、複合的な機能を備えた正門の整備による植物園の魅力向上と来園者サービスの向上
- 教育・学習・研究機能の充実と植物標本庫、展示室、図書コーナー等の整備
- 機能劣化した観覧温室の大規模改修又は建替えにより、機能を維持・確保
- 植物園と周辺施設がスムーズに繋がり、ハード・ソフト両面での垣根をなくした連携を可能とする施設整備

エ その他

- その他の府民利用施設以外の施設については、その機能や利用状況を踏まえ、類似機能の集約、共同利用、エリア外の適所への移転等を検討し、他用途へ転換することにより、他の施設と連携して北山エリアの魅力を高める機能を持たせる。

(3) 留意事項

北山エリアの魅力を高め、内外から多様な人が集い、滞在し、交流することを通じ、新たな京都文化の創造拠点として、また、京都を世界に発信する場となる街を目指すため、エリアの整備にあたっては、以下の事項に留意しながら整備を進める。

- 北山通より一筋北、下鴨中通より東、大学南側通より南は、閑静な住宅地を形成しており、周辺環境と調和するよう配慮する。
- 施設の整備・運営にあたっては、行政単独ではなく、PPP（Public-Private Partnership）をはじめ、民間等様々な主体のアイデアやノウハウ、人材、ICT 技術、資本等を活用しながら、最適な手法を選択する。
- エリア内の統一的な管理・運営や総合的なプロデュースを持続的に行うことが必要であり、そのためには核となる専門人材の配置や様々な主体との連携体制、事業スキーム、行政の関わり方に留意する。
- 施設整備においては、設備・構造・最新技術や搬入動線等に専門家の意見を反映させるなど、多機能でフレキシブルな、将来にわたって使い勝手がよくホスピタリティ機能が充実した施設となるよう留意する。
- 各施設の運営については、京都府の持つ専門的な知識や技術が求められる業務、民間等の創意や工夫により一層の効果が期待できる業務など、多様な主体と連携して業務ごとにそれぞれの特性を活かした最適な運営形態、包括的な運営について検討する。
- エリア内外の立地施設間のハード・ソフト両面での連携・協働を一層推進し、利用者目線でのまちづくりを進める。
- 北山エリアの将来像の実現に向けて、都市計画の側面からも必要な施策を検討する。
- 今後の施設の整備・運営にあたっては、第 5 世代移動通信システム（5G）の普及など、技術革新を見据えたハード・ソフト両面での環境整備・活用に留意する。
- 新型コロナウイルスの終息が見通せない中、今後の整備・運営にあたっては無観客配信ライブやオンライントークショー等、集客の仕方を工夫するなど、WITH コロナ・POST コロナ社会における社会状況の変化を考慮し、民間活力の導入にあたっては経済情勢等を十分に見極める必要がある。